

6:41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンです」と言われたので、イエスについて小声で文句を言い始めた。

6:42 彼らは言った。「あれは、ヨセフの子イエスではないか。私たちは父親と母親を知っている。どうして今、『わたしは天から下って来た』と言ったりするのか。」

6:43 イエスは彼らに答えられた。「自分たちの間で小声で文句を言うのはやめなさい。

6:44 わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。わたしはその人を終わりの日によみがえらせます。

6:45 預言者たちの書に、『彼らはみな、神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます。

6:46 父を見た者はだれもいません。ただ神から出た者だけが、父を見たのです。

6:47 まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。

6:48 わたしはいのちのパンです。

6:49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。

6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

6:52 それで、ユダヤ人たちは、「この人は、どうやって自分の肉を、私たちに与えて食べ

させることができるのか」と互いに激しい議論を始めた。

6:53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

6:55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。

6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

6:57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

6:58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」

6:59 これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。

パンとは人にとっては、生きるための糧であり、労働の目的です。世の人はそれさえあれば安心と思ひ、それが最優先課題であると信じ込んでいます。しかしイエス様はそれ以上に大切なものがあると教えられます。それは永遠に変わることはない「天」であり、この世の事象を支配する天の父のみこころです。ですから「天から下って来た」イエス様こそが、何よりも大切な方であり、肉体の命ではなく永遠の命のための「パン」なのです。イエス様は十字架でその「肉」を裂いて「与え」てくださって、「生けるパン」となってくだ

さいました。そこまでして与えてくださった永遠の命であり、また真理ですから、私たちはこれを最優先課題にして、そのためにこそ生きてゆきましょう。

「肉を食べ、その血を飲む」とは、イエス様の尊い犠牲を受け入れるということです。まるで人肉を食べるかのような、生々しい表現がなされています。しかしイエス様の十字架はまさに生々しいものです。そして痛み苦しによって、命が与えられているのですから、外れた表現ではないのです。むしろそれほどの犠牲によって、私たちは生かされているのだということを感じる必要があるからこそ、聖書にそのことばあるのです。

イエス様にそれほどの苦しみを負わせた私たちがなのですから、いまさら自分を取り繕う必要はありません。いまさらイエス様に負担をかけないような生き方ができるなどと、幻想を抱く必要もありません。それをイエス様も求めてはおられません。ただ「わたしを食べる者」が「わたしによって生きる」という、いのちの関係を願っておられるのです。

イエス様の「肉を食べ」「血を飲んだ」私たちは、「永遠のいのちを持って」いること、「終りの日によみがえらせ」ていただけることを、当たり前のように確信して、イエス様の愛のうちに日々、瞬間瞬間「とどまり」続けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？